



水上 不二 (水上家提供)

『海はいのちのみなもと』

波はいのちのかがやき

大島よ

永遠にみどりの真珠であれ』



亀山にある詩碑

ふるさとの海を一望する気仙沼大島の亀山には、郷土が生んだ詩人水上不二が最後に訪れたときに詠んだ詩碑があります。この詩は、たくさんの恵みをもたらしてくれた海への感謝とふるさと大島への祈りをこめて作られたものです。

不二は、明治三十七（一九〇四）年、本吉郡大島村（現在の気仙沼市大島）で漁師を営む父佐助、母あやの次男として生まれ、名前を佐蔵（後に「不二」と改名）といいました。子どものころから十八鳴浜や岩場を遊び場とし、真っ黒になるまで自然の中を走り回る自然が大好きな少年でした。

小学校高等科を卒業と同時に本吉郡立水産学校（現在の気仙沼向洋高校）へ進学した不二は、入学して間もなく運命の一冊と出会いました。それは『赤い鳥』という童話童謡雑誌でした。その中でも、北原白秋の詩を読むなり、大きな衝撃を受けたのでした。

（見たもの、聞いたもの、感動したものをこんなに素直に表現できるなんて……。詩に人を感動させる力があるなんて……。）

詩のもつ力に心を動かされた不二は、いつしか文芸誌に詩などを投稿するようになり、作品が掲載されるようになりました。うれしくなった不二は、寝る間もおしんで詩を作るようになり、その結果学校を中退してしまふのでした。

ある日、友人に教師になるための試験を受けないかと誘われた不二は、試験に見事合格し、十八歳の秋から地元の学校で教師生活をスタートさせました。そんな時でも詩の投稿に情熱を注いだのでした。また、子どもたちに雑誌『赤い鳥』を見せながら、雑誌への投稿を大いにすすめるのでした。

（あの感動した思いをこの子どもたちにも味わわせたい。それにはこれしかない。）
校長や同僚の先生から反対もされましたが、自らを信じ、詩のもつ力を信じた授業スタイルは、最後まで止めることはありませんでした。教え子の中には、自分を感動させた『赤い鳥』に掲載された子どももいました。不二はその雑誌をうれしそうに読む子どもたちの姿に静かにうなずくのでした。

（私もこの子どもたちを感動させる作品をつくりたい。もっと詩の勉強をするために東京に行くしかない。）

旅立ちには、せんべい布団と大きな希望の詰まった雑誌『赤い鳥』だけの暖かい春の日でした。

二十四歳で上京した不二は、教師生活を続けながら、北原白秋の考え方にさらに影響を受け、詩の中に子どもを登場させたり、子どもの自由な感情を表現したりする新しい技法にも挑戦するようになりました。初めて出した詩



教師時代の不二 (写真右側) (水上家提供)

十八鳴浜（くぐなりはま）……気仙沼市大島の北東部・大初平にある長さ約二百メートル、幅約三十一メートルの砂浜。黄褐色の石英粒がらなり、砂を踏むと「キョッキョク」とあるいは「クツクツ」（九十九と十八）と鳴くことからこの名が付けられた。

赤い鳥……日本の近代児童文学・児童音楽の創世期に最も重要な影響を与えた雑誌。
せんべい布団……綿が少なく、うすくて粗末な布団。

集は、ほとんど売れませんでした。そんなことで夢が揺らぐような不二ではありませんでした。

東京での生活にも慣れ、結婚して子どもにも恵まれた不二は、初めて白秋に会う機会に恵まれました。白秋は目の病気で光をほとんど失っていましたが、不二の目の前には自分があこがれていた白秋の元気な姿がありました。白秋の手を取り、そっと握りしめた不二は、さらに文学への火を燃やし、ペンを持つ手に力をこめました。

教師生活にピリオドを打ち、文学者への道を歩き出した不二でしたが、国中が戦争による暗い時代へと進んでいきました。食料も満足に手に入れることができないう生活が続き、しかも多くの文学者が戦争への意識を高めるような作品しか発表できなくなりました。しかし、不二は決してそんな作品をつくることはありませんでした。

(私は何のために詩を書いていたのだ。自分に嘘をつく教師、文学者などにはなりたくない。)

空襲により、家族の命の危険も感じるようになると、東京を離れる苦しい選択でしたが、気仙沼の大島に避難することを決断しました。

(必ず戻ってくる。いつか詩の力が必要になる、そのときまで……。)

しかし、避難した不二を待っていたのは、子どもたちに見た風景とはまるで別のものでした。子どもたちの遊んだ海にも山にも、子どもたちの笑顔は消えていたのです。

(子どもたちの笑顔を取り戻したい。私の信じた詩の力で笑顔をいっぱいにした

い。)

不二は自分の生活が苦しくても、詩を作ることを休むことはありませんでした。また、交通事情は最悪、雑誌を作る紙も不足していた時でしたが、出版社の人にお問い合わせのために焼け野原の東京へ何度も往復しました。熱い思いだけが不二を突き動かしたのでした。戦後の第一作「ハナノタネ」は、不二の子どもたちへの限りない可能性と未来に向けた応援詩そのものでした。この後も、水を得た魚のように子どもたちに愛される詩や学校で読んでもらえる詩を数多く作りました。いつしか『童謡詩人』と呼ばれるようになり、もなりました。

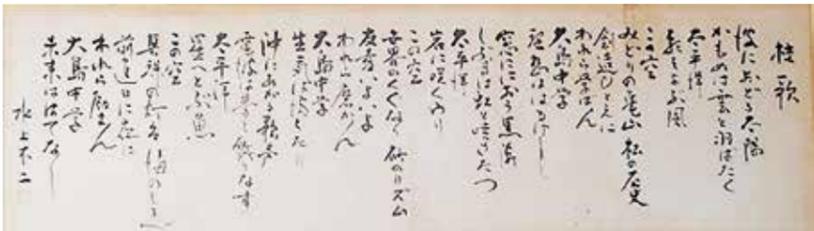
晩年、ふるさとの小中学校などから校歌などの作詞を数多く頼まれるようになり、母校の大島中学校の校歌を作詞したのも、そんな時期でした。校歌発表会の記念講演の中で、こんな言葉を子どもたちに贈りました。

「いま、君たちの頬にそよんでいる風は、世界を廻ってきた風ですよ。」

子どもたちにたくさんの希望の種をまき続けた不二は、六十一歳でこの世を去りました。

水上不二

水上不二は、明治三十七(一九〇四)年、本吉郡大島村(現在の気仙沼市大島)に生まれた。昭和三年上京し、小学校に勤務し、鈴木三重吉や北原白秋らと「赤い鳥童謡運動」に参加した。昭和十二年、まどみちおなどと童謡童謡雑誌「昆虫列車」を創刊するなど、自然の大切さや子どもの未来を照らす作品を作り続けた。地元の小中学校の校歌や各地の小唄、音頭なども多数作詞した。



直筆の大島中学校校歌(気仙沼市立大島中学校所蔵)

ハナノタネ	
キノウ	ヒグレノ ミチバタデ
ヒトツ	ヒロツタ ハナノタネ
オニハノ	スミニ ワタクシガ
コソソリ	マイタ ハナノタネ
ドンナ	オハナガ サクノヤラ
ドンナ	ニオイガ スルノヤラ
ウツクシイメガ	デルマデハ
オトウサンニモ	ワカラナイ
アオイハツパニ	ナルマデハ
オカアサンニモ	ワカラナイ
ソレハ	チイサイ ワタクシト
カミサマダケガ	シツテイル

戦後の第1作『ハナノタネ』